

大学における科目を連携させた授業の取り組み — 「図画工作」と「幼児体育」の授業実践報告3 —

智原江美・下口美帆

The Report on the Joint Classes 2011 on Art and Physical Education in Training Course for Nursery Teachers

Emi CHIHARA, Miho SHIMOGUCHI

I. はじめに

1. これまでの経緯

筆者らはこれまで、保育者を目指す学生が保育の現場での実践力を習得するには、保育者養成課程における授業科目の枠を超えた実践活動への取り組みが重要であることを本学紀要第46集および第48集で報告してきた。

「大学における科目を連携させた授業の取り組み—「図画工作」と「幼児体育」の授業実践報告—」第1報では、「図画工作」の授業での大型段ボール工作としての「まと制作」と作成したまとを用いた「幼児体育」での「まと当て」の活動を、両者の授業を連携させることによって学生が体験した『目的志向型』の連携授業としての取り組みを報告した。続く第2報では「織り」を取り上げて指を使った「図画工作」としての「織り」の作品制作と「幼児体育」での身体活動としての「織り」のそれぞれの作品制作の活動について報告した。これは「織り」という一つのテーマをとりあげて取り組んだ『テーマ展開型』の連携授業であった。これまでのこれらの連携授業の取り組みは授業の範囲内での取り組みであり、子どもを対象とした実践に結びつけられていないことが課題となっていた。中でも第1報での取り組みである「まと制作」と「まと当て」は、「制作したまとは子どもたちが興味を持って投球動作を経験できるようになっているのか」、また、「どのような改良が必要か」などの検証を行う活動にまで発展させることができていなかった。

今回は第1報の取り組みで課題として残った、子ども

を対象とした取り組みを行うこと、加えて、保育者として実践に活用できるように保育の指導計画を立案して活動を行うことを目的として「図画工作」と「幼児体育」の科目を連携させた総合的な取り組みを行ったので、その取り組みについて報告する。

2. 科目を連携させた取り組みの必要性—保育内容「表現」の視点から

保育者養成課程において科目間連携に重点をおいた取り組みを行うことは、実際の保育にとってはどのような意味を持ちうるのだろうか。本項では、幼稚園教育要領、保育者保育指針の変遷を軸に(1)総合的な活動の重要性、(2)領域間の関連性、(3)保育内容の大綱化について参照し、本取り組みの必要性について述べる。

(1) 総合的な活動の重要性

保育における総合的な活動の重要性については現行の幼稚園教育要領においても「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうもの」であり「内容は、幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものである」と示されている。また第3章一般的な留意事項においても「(4) 幼児が様々な人やものとの関わりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を生み出す事を考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活が充実するようにすること」と体験の多様性と関連性が必要である事が明記されている¹⁾。

保育所保育指針においても第1章総則 3 保育の原理 (2) 保育の方法の中でも、オ… (中略) … 乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」、第三章、保育の内容においても「五領域ならびに『生命の保持』及び『情緒の安定』に関わる保育の内容は、子どもの生活や遊びを通して相互に関係を持ちながら、総合的に展開されるものである」と示されている²⁾。

(2) 領域間の連関性

領域間の連関については、昭和38年9月教育課程審議会の答申「幼稚園教育課程の改善について」において、「幼稚園教育要領における健康、社会、自然、音楽リズム、絵画製作³⁾の各領域は、相互に有機的な連関があり、実際には総合的に指導されるものである事を明示する事」と述べられている⁴⁾。さらに、昭和39年教育要領改定の基本方針(3)においても、「総則第2章内容 健康、社会、自然、言語、音楽リズムおよび絵画製作の各領域に示す事項は、幼稚園教育の目標を達成するために、原則として幼稚園修了までに幼児に指導することが望ましいねらいを示したものである。しかし、それは相互に密接な連関があり、容易の具体的、総合的な経験や活動を通して達成されるものである。」⁵⁾と示されており、この考えは基本的に現在の課程にも踏襲されている⁶⁾。

(3) 内容の大綱化

また、保育内容のうち、現在でいう所の「領域：表現」で求められている「感性と表現に関する領域」の変遷に着目すると、昭和23年に文部省によって刊行された「保育要領-幼児教育の手引き-」における保育内容は「1 見学」「2 リズム」「3 休息」「4 自由遊び」「5 音楽」「6 お話」「7 絵画」「8 製作」「9 自然観察」「10 ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居」「11 健康保育」「12 年中行事」の12領域が設定されており、現在の領域「表現」に含まれるような活動は「2 リズム」「5 音楽」「7 絵画」「8 製作」「10 ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居」の5つの活動に分かれていた。同様に保育所の活動においても、昭和25年に厚生省児童局による保育指針もそれに準じたものと現在と比較して細分化されたものであった。これは当時の「保育要領」の位置づけが「『幼稚園における教師や、いろいろの施設において幼児教育に当たっている人々や家庭の母親たちは、幼児の特質がどんなものかをよくわきまえ、それに応じた

適切な教育や世話の仕方、その他それに必要な設備や道具や材料のことなどについて十分な理解をもたなければならぬ』(一、まえがき)とあるように、保育所等や親(家庭)にも読まれ利用されるよう意図されている」(民秋2008)⁷⁾のものであったため、具体的に示す必要があったものと思われる。

その後昭和31年にこの「保育要領」が「幼稚園教育要領」として文部省によって改訂され、教育の内容が「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」の6領域となった。感性と表現に関する領域は「音楽リズム」と「絵画製作」に分かれていた。平成元年の第2次改訂によって、教育の内容が新たな視点で見直され、教育内容は「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域となり、それまでの「音楽リズム」と「絵画製作」は感性と表現を育むための活動として「表現」として捉えなおされた。その後平成10年、20年と改訂が行われたが、教育内容の区分については同様の5領域となっている。

保育所保育指針においても昭和40年の保育指針制定時は「4歳以上では幼稚園教育要領の6領域におおむね合致するように」とされ「健康」「社会」「言語」「自然」「音楽」「造形」の6領域が設定されていた。その後平成2年の改訂によって「基礎的事項」として「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域が設定された。保育指針もその後大きな変更はなく平成11年、平成20年と改訂が行われたが保育の内容における教育の部分については5領域となっている。

このような大綱化は「各園が持つ条件に合う形で創意工夫をこらすこと」⁸⁾を求めるものであったが(民秋2008)、実際に保育を実施する保育者にとってはどのような意味を持っていたらうか。

以上のような大綱化について表現の領域に着目した場合、単なる領域の統合ではなく子どもの「表現」のあり方を、「特定の活動や媒体に限定されるものではなく、子どもから発せられる様々な表現のあり方全体を含」⁹⁾むと捉え直されたものであると云える。「音楽リズム」「絵画製作」のように各領域が別れ、それぞれに実施の際の注意点が具体的に示されている場合と、現行のように「表現」としてその活動が一つの領域内で示されている場合では、表現活動の捉え方や実施方法に大きな差が生まれることは想像に難くない。例えば領域「表現」2内容から「(6)音楽に親しみ、

表 1 保育内容の変遷

幼稚園		保育所	
保育要領		児童福祉施設最低基準	
1948 (昭和 23) 年	(幼児の保育内容) 12 項目 1 見学 2 リズム 3 休息 4 自由遊 び 5 音楽 6 お話 7 絵画 8 製作 9 自然観察 10 ごっこ遊び・劇遊 び・人形芝居 11 健康保育 12 年中 行事	1948 (昭和 23) 年	(保育の内容) 健康状態の観察, 服装等の以上の有 無についての検査, 自由遊び及び昼 寝の他…健康診断を含む

幼稚園教育要領		保育所保育指針	
1956 (昭和 31) 年 制定	(教育内容の領域の区分) 6 領域 健康、社会、自然、言語、音楽リズム、 絵画製作		
1964 (昭和 39) 年 改訂	(教育内容の領域の区分) 6 領域 健康、社会、自然、言語、音楽リズム、 絵画製作	1965 (昭和 40) 年 制定	(望ましいおもな活動) 1 歳 3 ヶ月未満：生活・遊び 1 歳 3 ヶ月から 2 歳まで：生活・遊び 2 歳：健康・社会・遊び 3 歳：健康・社会・言語・遊び 4・5・6 歳：健康・社会・言語・自然・ 音楽・造形
1989 (平成元年) 改訂	(教育内容の領域の区分) 5 領域 健康、人間関係、環境、言語、表現、	1990 (平成 2) 年 改訂	(内容) 年齢区分 3 歳児から 6 歳児まで 基礎的事項・健康・人間関係・環境・ 言葉・表現※年齢区分 6 ヶ月未満児 から 2 歳児までは上記を「一括して 示してある」
1998 (平成 10) 年 改訂	(教育内容の領域の区分) 5 領域 健康、人間関係、環境、言語、表現、	1999 (平成 11 年) 改訂	(内容) 発達過程区分 3 歳児から 6 歳 児まで 基礎的事項・健康・人間関係・環境・ 言葉・表現 ※発達過程区分 6 ヶ月未満児から 2 歳児までは上記を「一括して示して ある」
2008 (平成 20) 年 改訂	(教育内容の領域の区分) 5 領域 健康、人間関係、環境、言語、表現、	2008 (平成 20) 年 改定	(保育の内容) 養護：生命の保持・情緒の安定 教育：健康、人間関係、環境、言語、 表現

幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷 民秋言 編 萌文書林 2008 年 7 月第 2 版 教育・保区内容の「領
域」の変遷に 1948 年部分を筆者加筆

歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」と「(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりする」の項目は、従来であれば「音楽リズム」と「絵画製作」にはっきり分かれていた活動であるが、同じ「表現」という領域内にあることによって、各々の活動の融合や往来が可能になる。

しかし、総合的な活動を行うことだけを目的化してしまい、内容の浅い活動になってしまっは本末転倒である。柔軟に活動を組み立てることが可能になった一方で、保育者にとっては、それぞれの活動に対する

より深い理解と応用力、活動を組み立てる構成力が求められるようになったと考えられる。

総合的な活動を計画・実施出来る保育者を養成するためには、養成課程において、様々な芸術表現が持つ特性を理解することと、それらに共通性や協同可能性を見だし、組み立てる体験の両方が必要であると考ええる。

以上、(1) 総合的な活動、(2) 領域間の連携、(3) 保育内容の大綱化の観点から、保育士養成課程においても科目間連携をふまえた総合的活動の経験が必要であるとされる。そこで本取り組みでは、「図画工

作Ⅱ」と「幼児体育Ⅱ」の各授業において、それぞれの科目からの学びを習得すると同時に、各科目が別れたものではなく一つの総合的な活動として実施可能であることを示すことによって、保育者として活動を構成する力を伸ばすことが保育者の資質を高める上で必要であると考え、連携授業を実施した。

Ⅱ. 連携授業の概要

1. 新しい取り組み

これまでの「まと制作」と「まと当て」の連携授業での経験を踏まえ、今回の活動ではいくつかの新しい取り組みを行った。

「図画工作」では制作する「まと」の対象年齢をあらかじめグループごとに割り振り、作品の対象がある年齢に偏らないよう、また、対象年齢の投球動作の特徴を把握してポイントを定めやすいようにした。さらに、事前に3・4・5歳児の平均身長を提示し作成するまとの大きさを割り出せるようにした。加えて、「幼児体育」の授業では1年次に学習した投球動作の発達段階について再確認を行うとともに、幼稚園で撮影した「まと当て遊び」の活動の様子を視聴し、幼児の実

際の活動をイメージできるようにした。そして最後に従来からの課題であった、子どもを対象とした「まと当て遊び」の実践を行った。また、実践に先立って受講生が保育指導案を立て、保育者としての今後の実践の場での指導に生かすことができるよう取り組んだ。

2. 連携授業の流れ

平成23年度後期の「図画工作Ⅱ」と「幼児体育Ⅱ」の連携授業の取り組みは、後期授業開始前より担当教員間で数回の打ち合わせを行い、表2に示す日程で行った。

それぞれの科目の受講者・活動の参加者数は次のとおりである。

「図画工作Ⅱ」（2年生選択科目） 受講者 24名
 「幼児体育Ⅱ」（2年生選択科目） 受講者 20名
 「図画工作Ⅱ」および「幼児体育Ⅱ」両科目の受講者 10名

光華幼稚園ひかり組（預かり保育）での実践活動の参加者 2名

以上の取り組みについて、以下のⅢ、Ⅳで報告する。

表2 連携授業の流れ

日程	主な講義内容	場所	担当教員
11月24日 1コマ (90分)	「幼児体育Ⅱ」 ・投球動作の発達段階と投球能力の変化 ・幼児の投球動作の発達についての話し合い ・幼児のまと当て活動のビデオ視聴 ・投球動作習得につながるいろいろな遊び	講義室	体育担当教員
12月2日 1コマ (90分)	「図画工作Ⅱ」 導入：ダンボールの特性と取扱いに関する基礎知識 保育教材としてのまとについて 制作の計画を立てる	総合実習室2	図工担当教員
12月9日 1コマ (90分)	「図画工作Ⅱ」 グループごとのまと制作①	総合実習室2	図工担当教員
12月16日 1コマ (90分)	「図画工作Ⅱ」 グループごとのまと制作②	総合実習室2	図工担当教員
12月22日 1コマ (90分)	「幼児体育Ⅱ」 制作した「まと」を用いての「まと当て」と評価	体育館	体育担当教員 (一部 図工担当教員)
3月7日 立案と準備 (120分) 実施 (45分×2)	光華幼稚園「ひかり組」での実践 ・保育指導案の立案 ・ひかり組での指導 ・実践を振り返っての反省・感想	光華幼稚園 遊戯室	図工担当教員・ 体育担当教員

Ⅲ. 各教科での取り組み

1. 「まと」制作に先立った「幼児体育」での取り組み

先にも挙げたように、今回の取り組みの特色は、「まと制作」に取り組む前に幼児の投球動作や投球能力について説明することによって、投球動作指導のためのまとの必要性を認識させることであった。

今回の「図画工作Ⅱ」での「まと制作」に先立って「幼児体育」では次の項目を取り上げ、投球動作に関しての講義を行った。

① 投球動作の発達段階と投球能力の変化について

まず、投球動作の発達段階の確認を行った。1年次の「保育内容Ⅰ（健康）」の運動技能の発達についての講義では3・4・5歳児それぞれの年齢にみられる特徴的な投球フォームの図を示すとともに、年々投球能力が低下してきていることを説明してきたが、これらのことが記憶に残っている学生はほとんどいなかった。授業では、再度、3・4・5歳児の運動能力の発達の特徴を確認し、年齢による特徴的な投球動作の発達の様子を資料として示した。

② 幼児の投球動作の発達についての話し合い

①で示した資料をもとに、投球動作の変化について3～4人のグループごとに話し合いを行った。腕・肩・上体の使い方と脚の踏込に注目して資料として示した図から理解した投球動作の発達について気づいたことを発表した。その後、まとめとして、一般的な幼児期の投球動作の発達について確認した。

③ 幼児のまと当て活動のビデオ視聴

平成21年に生駒市立桜ヶ丘幼稚園にて撮影した3・4・5歳児の「まと当て」の活動を撮影した映像を視聴し、実際の投球動作の発達の様子を確認した。

④ 投球動作習得につながるいろいろな遊び

①～③の投球動作発達の確認に加え、肩や上体の使い方、腕のしならせ方が投球動作につながるとされている「紙飛行機」、「めんこ」、「紙鉄砲」¹⁰⁾などの遊びについて作り方を示し、実際に「紙飛行機を飛ばす」、「紙鉄砲を鳴らす」活動を行うことを体験し、肩、上体、腕の使い方等について確認した。

以上の①～④内容で投球動作について講義を行い、子どもが楽しく投球動作を習得するためのきっかけとなるための「まと制作」と「まと当て」の活動に取り組むことを説明した後、「図画工作Ⅱ」での「まと制作」

の活動に入った。

2. 「図画工作」での取り組み

(1) 取り組み概要

「図画工作Ⅱ」の授業では90分×3時間を充てて「保育教材としてふさわしいまと」の企画・制作を実施した。1時間目は導入として、ダンボールとその取り扱いに関する基礎知識、投げる遊びとまとの関係、投動作の発達、保育教材としてどのようなまとが良いかについて講義を行ったのち、グループごとに分かれてまとの企画と作業計画を立てた。2・3時間目においては1時間目の計画に基づいて制作を行った。

本課題を実施するにあたり、図画工作面と連携授業面の2つの面から各ねらいを設定した。図画工作面におけるねらいは「①ダンボールの特性と加工の手法について知る」「②保育の教材としての「まと」にふさわしいイメージについて考える」「③発達段階に応じた投動作の成長を促す「まと」の形や仕組みについて考える」「④共同で制作することを通して、段取りや分担について話し合い、協力して作り上げる体験をする」の4点、連携授業面のねらいとしては「⑤ねらいとする運動・まとの機能・保育の教材、といった諸要素の関連について考える」「⑥まとを実際に体育の授業で使ってみることを通して、意図したように機能するか確かめる」「⑦図工と体育という科目間の関連性について認識を深める」の3点である。

実施の詳細については第一報とほぼ同様であるので省略し、以下に改善点のみ詳述する。

(2) 前回からの改善点

前年度までの取り組みから、受講生達の感想として「まとが小さすぎた」という意見が多く挙がっていた。受講生達は子どもが投げるという事を踏まえて制作していたにもかかわらず、ボールなどの投げる物体からまとの大きさを割り出したり、仕組みの面白さを優先させた結果、まとをあてる（もしくはボールを入れる）部分の大きさが小さくなり、難易度が高くなる傾向があった。実際に投げてその効果を検証した受講生は、投げたボールがある程度入ることが、投げる事の楽しさを感じ、繰り返し投げる動機につながると感じており、次回改良するとしたらもっとシンプルで大きなまとを心がけたいという意見が挙がっていた¹¹⁾。

そこで、今回はより子どもの視点に立って考える事を促すため、年少児・年中児・年長児の男女別平均身長を示し、メジャーを各グループに配布、実際にどのくらいの高さか見るように促した。投げ方の観点からは、幼児体育で使用した「投運動の縦断的発達」の写真を用いて年齢ごとの投げ方の特徴と変化を示した。幼児体育で使用した資料を図画工作の授業でも共用することによって、両科目の連関を印象づけるようにした。

まとの形を考えるに先立ち「年齢によって投げ方が違います。それぞれの発達にふさわしいまとはどのようなものでしょうか。」という問いをなげかけ、各発達年齢ごとの投げ方の特徴を資料から読み取り、それぞれの投げ方にふさわしいまを考えることを促した。受講生全員で意見を出し合い、特徴や望ましいまとのイメージについて共有した。受講生の意見は以下の通りである。

<年少児について>

◎ 発達や投げ方の特徴

- ・手だけ動かして投げる
- ・踏み込む事がまだできない
- ・足は使っていない
- ・身体を使っていない
- ・ねらいを定められない

◎ どんなまどが良いか

- ・投げる楽しさを味わえるまど
- ・難易度が低いまど
- ・投げる事への動機付けがはかれるまど

<年中児について>

◎ 発達や投げ方の特徴

- ・足の踏み込みがある
- ・腕を使って投げる事ができる
- ・ある程度ねらったところに投げる事ができる
- ・体を少し使っている

◎ どんなまどが良いか

- ・ねらった所に投げる事が楽しくなるようなもの

<年長児について>

◎ 発達や投げ方の特徴

- ・体をひねる動作がある
- ・ねらった所に向かって強く投げる事が出来る
- ・足・腕・腰・肩を使って投げる事ができる

◎ どんなまどが良いか

- ・強く投げられるまど
- ・あえて小さめのまど

これらの意見をふまえた上で「『保育の教材としてふさわしいまど』とはどのようなものでしょうか」という問いを投げかけ、徐々に具体的に考えられるように促した。

<学生の意見>

- ・子どもの成長に合わせて作ったまど
- ・子どもが当てやすい高さにする
- ・達成感が味わえるまど
- ・かわいらしく、ポップな色、明るい色合い、音が鳴るもの
- ・子どもが好きなキャラクターや動物を使う
- ・子どもが興味、関心のあるものを題材にする
- ・絵や飾りが可愛く、楽しめるまど
- ・的に当たると変化があり、面白いと感じるもの
- ・点数や当たるとすごいと思われるまど
- ・やっつけるものは避けた方が良い
- ・苦手な子も楽しめるまど

などの意見が挙がり、投げる動作の発達と的の形態の関連、動機付けの工夫、保育上必要な配慮について事前に考慮している様子が伺えた。以上の様子から、ねらい「②保育の教材としての『まど』にふさわしいイメージについて考える」「③対象年齢の発達段階において、投動作の成長を促す「まど」の形や仕組みについて考える」「⑤ねらいとする運動・まどの機能・保育の教材、といった諸要素の関連について考える」について多くの学生が考えることができていた。

(3) 今回の取り組みの結果

幼児体育の資料の中から、次に行う図画工作の制作活動への導入とした事で、目的とする運動と制作するまどの形態の関連性がより明確となり、ねらいとする体の動きに即したまどの計画を立てている様子が見られた。特に全体の高さともとする穴の大きさについては例年よりも留意しており、すべての班が、身長から腕の高さを割り出し、高さや大きさを計測しながら制作を進めていた。

また、ねらい「①ダンボールの特性と加工の手法について知る」についても、制作を進める中でダンボールの折りや切断、接着、着色、組み立てなどの活動を

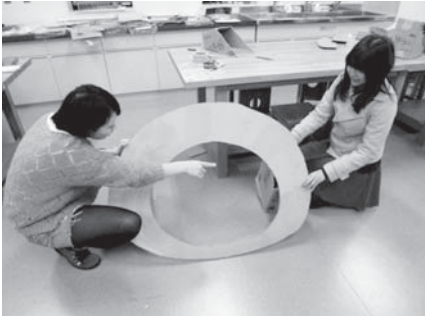


図1 制作の様子1



図2 制作の様子2



図3 制作の様子3

行い、講義から得た知識を基に、実際に手を動かして作る体験を通して加工技術を身に付け、子どもに出来る部分と援助が必要な部分について認識を深めた。

以上の考察・計画・制作の過程を経て、年少児向け、年中児向け、年長児向け各2つずつ、計6個のまどが出来上がった。それぞれのまどに対して、各班「担当した年齢のこどもの投げ方の特徴をふまえて、「まどを作る際に工夫した所」が出来上がってから、実際に投げる前に挙げてもらうことで子どもの活動と作ったまどとの機能の関連について考えるよう促した。

このような、それぞれの班が対象とする発達年齢にふさわしい投運動を促すという意図が反映されたまどが制作された。年少児向けのまどは、まどとなる穴に入ることそのものが投げることへの動機付けとなるように、入りやすさを重視して口を大きく開けて低めに設定された。年中児向けのまどは、ねらった所に入ることがはっきり分かるような工夫がなされていた。年長児向けのまどは、よりねらいを焦点化するために入れる部分を小さくしたり、投げる時の力強さを引き出すために、当たると打ち抜くことができるなどの工夫がなされた。これらの制作意図が実際に達成されたかどうか、検証を幼児体育の授業にて行った。

◎ 年少児向け



図4—まどA (キャラクター)

<工夫した点>

年少児は身長が低いので、まどは低めにして、できるだけ大きな的になるよう意識しました。キャラクターを使う事で子どもたちが楽しめるようにしました。



図5—まどB (うさぎ)

<工夫した点>

年少児なので、まどを大きくして袋の中にボール（人参）を入れる という仕組みにしました。安定感を求めて支える台を頑張ってつくりました。

◎ 年中児向け



図6—まともC（女の子）

＜工夫した点＞

ランチボックスの口を大きく作り、入れやすくした。投げる意欲を持てるように投げるものを具体的に作った。

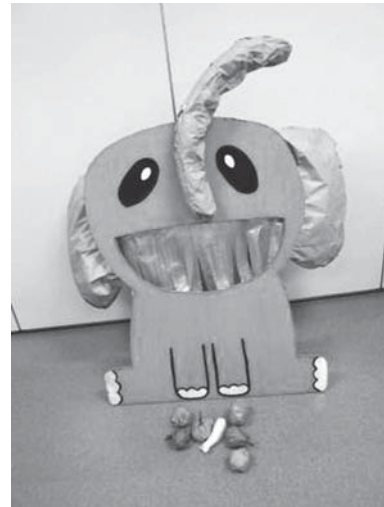


図7—まともD（ゾウ）

＜工夫した点＞

入りやすいように口を大きくした。目線の高さを年中児の平均身長に合わせた。

◎ 年長児向け



図8—まともE（宇宙）

＜工夫した点＞

まともあての壁に角度をつけた。宇宙、空をイメージして、ボールを飛行機、ロケットにした。安全を考えて丸みのあるものにした。まとの大きさに大・小の差をつけた。



図9—まともF（恐竜）

＜工夫した点＞

まともをねらせるようになってくるので、まともを少し小さくして楽しめるようにした。口をスズランテープで表現した。

3. 「まとも」完成後の「幼児体育」の取り組み

「図画工作Ⅱ」での「まとも」が完成した後、6体のまともを体育館に運び入れた。授業開始前の昼休みに運び入れることとなったため、午前中体育館を使用していた幼稚園の母親の活動と一緒に来ていた幼児たちが

興味を持って集まり、まとも当て遊びをすることとなった。年齢も様々な幼児であったので、それぞれの好みのキャラクターや投能力に見合った興味のあるまともに向かってまとも当てを体験し、30分程度非常に楽しく取り組んでいた。その様子は図10から図13に示す。



図 10 体育館でのまと当て遊びの様子①



図 11 体育館でのまと当て遊びの様子②



図 12 体育館でのまと当て遊びの様子③



図 13 体育館でのまと当て遊びの様子④

この活動は担当者の意図していないことであったので、事前に子どもの年齢を聞いて活動を組み立てることはできなかったが、年齢の高い幼児には工夫を凝らしたまと（図8および9）に人気があった。30分程度の活動であったが、この段階でいくつかのまとは部分的に破損が見られ、応急的な修理が必要となった。

「幼児体育Ⅱ」の授業では、出来上がったまとに向かって実際に「まと当て」を行った。まと評価のためのシートを事前に作成し（資料1）受講生には予め評価の観点を説明した。その後、まと制作者がそれぞれのまとの対象年齢、特徴、制作時に工夫し点等について説明を行い、実際に「まと当て」を体験した。先に示した評価票に基づき受講者20名がそれぞれのまとについて投球動作を行ない評価した。その結果について示す。

評価票では、どのまとに対しても共通して次の3つの項目を尋ねた。

- ① この作品でまと当てを行ってみて、あなたは投球動作を楽しく行うことができましたか。
- ② このまとに投げることで、上記に書かれている幼児に習得させたい動作が経験できると思いますか。
- ③ このまとは保育教材として適切だと思いますか。

上記の3項目について5段階評価を行い（5：とてもそう思う、3：どちらでもない、1：そう思わない）、それに加えて、感想等を自由に記入することのできる自由記述の欄を設けた。「図画工作Ⅱ」の取り組みで述べたように、3歳児向けの「まと」として、「まとA（キャラクター）」、「まとB（ウサギ）」、4歳児向け

の「まと」として、「まと C (女の子)」、「まと D (ゾウ)」、5歳児向けの「まと」として、「まと E (宇宙)」、「まと F (恐竜)」の6点について評価した。①から③

表3 質問① この作品でまとあてを行ってみて、あなた自身は投球動作を楽しく行うことができましたか？

	5	4	3	2	1
A：トトロ	59%	41%	0%	0%	0%
B：ウサギ	71%	29%	0%	0%	0%
C：女の子	65%	35%	0%	0%	0%
D：ゾウ	35%	59%	6%	0%	0%
E：宇宙	35%	59%	0%	6%	0%
F：恐竜	71%	29%	0%	0%	0%
計	56%	42%	1%	1%	0%

表4 質問② この的に投げることで、上記に書かれている幼児に習得させたい動作が経験出来ると思いますか？

	5	4	3	2	1
A：トトロ	47%	41%	12%	0%	0%
B：ウサギ	65%	35%	0%	0%	0%
C：女の子	41%	47%	12%	0%	0%
D：ゾウ	53%	29%	6%	12%	0%
E：宇宙	41%	47%	6%	6%	0%
F：恐竜	47%	41%	12%	0%	0%
計	47%	42%	8%	3%	0%

表5 質問③ この的は保育教材として適切だと思いますか？

	5	4	3	2	1
A：トトロ	76%	24%	0%	0%	0%
B：ウサギ	88%	12%	0%	0%	0%
C：女の子	76%	24%	0%	0%	0%
D：ゾウ	41%	47%	12%	0%	0%
E：宇宙	29%	41%	24%	6%	0%
F：恐竜	65%	24%	12%	0%	0%
計	61%	30%	8%	1%	0%

の質問に対する回答結果は表3から表5に示す。

まと A は質問項目①と③について「5」の評価が高かった。その理由として、3歳児の身長にあったまとであること、ボールが入りやすいことが評価されていた。また、子どもの好きなキャラクターであったことやドングリを投げ入れることも幼児の興味を引くであろうことも評価されている。

まと B はすべての質問項目において「5」の評価が高かった。その理由としてウサギの口が大きく、低い位置に穴があいていたのでまとに入れやすいとの評価が非常に多かった。また、投げるものとしてボールの代わりにウサギの好物のニンジンを模したものを制作

しており(図5)、持ちやすく、また、自然と上手投げを引き出すような形状(図14)になっていた。

まと C は質問項目①と③について「5」の評価が高かった。その理由として、ランチボックスに食べ物を入れるというコンセプトに人気があった。投げ方については、上手投げ・下手投げの両方で投げやすいとの感想が多くみられた。

まと D は「4」の評価が多く見られた。自由記述の欄には「投げ入れるのが難しかった」という記述が多く見られた。4歳児の身長に合わせてまとの高さを設定している点は評価している学生が多かった。

まと E は6作品のうち唯一、穴に投げ入れる形式のまとではなく、当たると抜ける仕掛けとなっているストラックアウト形式のまとであった。Eについても「4」の評価が最も多く見られた。評価が相対的に低かったものの、自由記述欄には投球動作に関しての記述がもっとも多く、具体的な評価をしていることが見て取れた。特に投球動作に関しては、「自然に足も出てくるし、まとをねらおうとする気持ちが出てくると思う」「ちゃんとあたらないとまとが落ちないのでよい」「意欲がでる」といった記述がみられた。

まと F も質問項目①と③について「5」の評価が高かった。まと F は立体的になっていることが特徴で、口から入ったボールが後部から出てくるようになっている仕掛けに人気が集まった。投球動作に関しての記述としては、「少しまとが小さいので狙いや距離を考えないとはならない」といったような記述が多かった。

上記の評価票による評価以外に、まと当てとして投球運動を行った感想を尋ねた。「投げる目標ができるので楽しめる」、「まとがあるので自然と狙って投げた



図14 自然に上手投げになる投射物としてのニンジン

いと思える」、「狙いを定めて投げることはいろいろなスポーツで大切だと思う」、「大きいまとはすぐ当てる楽しさ、小さいまとは難しいけれど当たった時の嬉しさがあってよいと思った」、「ねらったところに当たるかどうかがだんだんキャッチボールやドッジボールにつながってできるようになっていくと思った」、「何度もやりたくなるし失敗したらまたやろうという気持ちになり、投球力がついていきそうに思う」、「ただ投げるよりも的をねらう方が自然と体の動きが出てくると思う」といった感想があがった。一方で、「まるとに当てるために投げ方が自己流になってしまう可能性がある」、「保育者の指導をしっかりしなければいけないと思った」といった指導する上での留意点を上げる受講生もいた。

まと制作の前に投球動作の発達段階などに関する講義を行い目的に見合ったまと作成を意識させた今回の一連の取り組みは、これまでに比べ年齢に見合ったまとであるかどうかという視点に立った受講生の評価が多く見られた。それでもなお、受講生のまとの評価の観点は見栄えのする作品かどうかということにポイントをおいた評価が相対的に高かったようである。体育担当教員としてはシンプルであっても繰り返し投球動作を引き出すようなEのまと作品のような仕掛けが望ましいのではないかと考える。

4. 「連携授業」としての学び

連携授業のねらいとして、「⑤ねらいとする運動・まとの機能・保育の教材、といった諸要素の関連について考える」「⑥まとを実際に体育の授業で使うことを通して、意図したように機能するか確かめる」「⑦図工と体育という科目間の関連性について認識を深める」の3点を挙げていたが、それらが達成されたかどうか学生が学びを振り返って確認するために幼児体育の授業終了時にレポートを実施した。

ねらい「⑤ねらいとする運動・まとの機能・保育の教材、といった諸要素の関連について考える」に関しては、

- ・まとがあることで、どこにめがけるかなどの目標が出来て楽しめる。
- ・まとのデザインとボールによって遊び感覚で投球運動が出来ると思いました。
- ・ねらった所に入れられるかどうかというのが、だ

んだんキャッチボールやドッジボールなどができるようになっていくと思います。

- ・投げる目標があることで頑張っけて投げようとするし、失敗し、繰り返すことで力がつくと思った。
- ・ただ投げるよりもまとをねらう方が自然と体の動きも出てくる
- ・ねらう所がはっきりしてわかりやすい
- ・キャラクターや動物のまとになっていることでやる気が高まるし、そこに入れる、ねらって投げるができる。
- ・可愛いもの、面白いものを提供することで子どもたちの意欲がわく。

などの記述がみられ、今回の「ねらいとする運動」=「投球動作」をやってみたくと思える「保育教材」としてのまとがあることによって、「ねらいを定めることができる」「楽しんで取り組める」「繰り返し遊べる」効果があることに気付くことが出来ていた。

ねらい「⑥まとを実際に使ってみることを通して、意図したように機能するか確かめる」に対しては、自己評価としては

- ・実際に使ってみると、強度に問題があるのに気づいた。
 - ・もっと強くしてガムテープだけじゃなくていろいろな方法で強くしたらよかったですと思いました
 - ・高さがもう少し低くてもよかったかなと思いました。
 - ・高さやまとの大きさ、段ボールをもう一段高くすればよかったかなと思います
 - ・「まとは大きいくらいがちょうどいい」などの適正な高さや大きさについて、まとだけではなく「ボールの数を多くしておくべきだ」と思いました
- など、繰り返し使用に対する強度不足やボールなどの投げるものへの配慮など改善点を挙げている受講生が多く見られたが、他のグループのまとを投げて書かれた他者評価においては、
- ・まと A に対して「口がたてに大きいのはじめてには良いと思う」
 - ・まと B に対して「少し斜めになっているし、袋もついていて高さもあって入りやすくて良かった」「3歳に合う大きなまとだと思う」
 - ・まと C に対して「高さは合っていると思う」
 - ・まと D に対して「上から入れるので適している

と思った」

- ・まと F に対して「まとの目線が年長サイズなのでよかった」

のように、まとの高さや大きさについては概ね適しているとの意見が寄せられた。また、まと E については「一つ一つのまとが小さく、そんな簡単に抜けないので、5歳児には少し難しいかな、と思った」という意見と「少し難しいので、入ったとき嬉しい」という意見の両方が挙がっていた。

本取り組みの最も大きな目的であるねらい⑦「図工と体育という科目間の関連性について認識を深める」に対しては

- ・作る楽しさと投げる楽しさ、どちらも出来て良かった
- ・作って投げるという一連の流れは子どもも出来るし愛着もわくしいと思いました
- ・2つの教科は全く違うものだと思っていただけにこういう風に流れとして各年齢の事がもっと詳しく知れたと思う。

といった活動の流れに関する記述や、科目を超えた取り組みの必要性を実感したと見られる記述がみられた。

また、作って使うプロセスを通して「自分が作ったまとなので愛着があり大切に使いたいと思いました」「自分で最初から作り、出来たときには達成感があった」といった受講生自身の感情について述べた意見が挙がったが、これらの愛着や達成感には実際に子どもたちが制作する場合にも想定される感情である。学生が保育を行う前の段階として子どもが感じるであろう心の動きを自らが体験することには意義があると考えられる。さらに、「子どもたちはどのようにしたら楽しく遊ぶ事ができるのか、意欲を引き出せるのかを考えた」と子どもへのアプローチを考えながら計画・制作を進めていた様子が伺える記述も見られた。一方で「年齢にあったものを作れたのか自信がないです」などの意見もあったが、これは年齢に合ったものを作った方が望ましいという考えが表われたものと考えられる。

実際に子どもの活動で使う場合に必要な配慮については「子どもたちは、まとは出来ても立てるためにどうするかが分からないと思うのでそこは援助しなくてはいけないと思いました。」とまとの制作を子どもが行う際に必要な援助について考えたもの、「子どもた

ちに「うさぎが人参食べてるよー」などの声かけをしながら子どもたちと関わればもっと楽しいと思う。」などの意見に代表される、遊びを促すための働きかけ、「(ストラックアウト型のまとを制作した学生)一つ一つのまとがとれるので、保育者が見守る必要がある」などの活動を円滑に進めるための配慮などの記述がみられ、今回の連携授業全般を実際の保育に置き換えた場合を想定した考察に及んでいた。

5. 連携授業の意義

これまで領域間の連携を深める立場から連携授業・総合的な取り組みとしての重要性を述べてきた。しかし、実際の現場ではそれぞれの科目がそれぞれの科目担当者の考えに沿って提供されている。ここでは「まと」を共通のテーマとして科目を連携させた授業と、「図画工作」、「幼児体育」の独立した科目として「まと制作」と「まと当て」をそれぞれ教材として取り上げられることを比較して、このような領域間連携がどのような具体的メリットをもたらすかを各々の科目担当者の視点をあげる。

「図画工作」においては、単独の段ボール工作としての「まと制作」を取り上げた場合、デザイン性やまとのしかけを重視した作品、あるいは実際の幼児の体格や投球能力を考慮しない大人(学生)の視点から作成した作品が多くなるのではないかと考えられる。保育の教材として重要なことは芸術的な観点だけでなく保育の教材として実用であることが最も重要である。子どもがある動作を身につけるためには、繰り返し遊ぶことが効果的であると考えられるが、そのためには何度も遊びたくなるようなデザインと繰り返し使用に耐えられるよう耐久性に優れていることが非常に重要なポイントとなってくる。また、子どもは大人が予測できないような使い方をすることもあるため、安全面の配慮も必要である。さらに、幼児体育で幼児の投動作の発達を事前に学んだことによって、発達ごとのまとのあり方を念頭に置き、年齢に応じたまとを制作していた。このような観点は単に図画工作の作品としてまとを作成する場合には考えが及びにくいことかもしれない。「幼児体育」と連携することで、受講生は子どもの発達を念頭に置き、また実用的な観点からの配慮の必要性を学ぶ機会となると考えられる。

一方、「幼児体育」の視点から見た連携授業の意義

としては、投球動作を習得するための環境としての「まと」の存在を意識できることがあげられるであろう。様々な「まと」に向かってまとの形状に対応した投球動作を行うことは自ずから子どもの投球動作を合理的なものに導くことができる。子どもの発達に見合った環境設定を保育者が提供することの重要性を理解する手掛かりとなると考えられる。

IV. 幼児を対象とした実践

1. 取り組みの概要

これまでの「まと制作」と「まと当て」の連携授業で課題として残っていたことが、実際に幼児を対象とした実践で子どもを対象とした「まと当て」あそびができていないことであった。そこで今回は完成した「まと」を光華幼稚園の預かり保育「ひかり組」の保育で実践する機会を設定した。実施は園と担当教員の都合を調整して3月7日となった。この日は2年生は卒業を控えた春休みであったため、「図画工作Ⅱ」と「幼児体育Ⅱ」の受講者全員を対象に参加者を募ったが、参加した学生は2名であった。

ひかり組は光華幼稚園が通常保育終了後14:30から16:30まで行っている、3・4・5歳児混合の預かり保育である。その保育うちの90分間を学生が「まと当て」の活動として担当する機会を得た。実施当日のひかり組の参加幼児は23名であり、光華幼稚園の遊戯室で活動を行った。

2. 保育指導案と実践について

ひかり組での「まと当て」遊びの実践に先立って、参加学生が保育指導案を立て、それをもとに指導を行った。保育指導案をたてる前には担当教員と活動を希望した学生との間で「遊びを通して投動作の発達を促す体験をする」ことをねらいとすることを確認したうえで学生が主体となって保育指導案（資料2）を立てた。

「まと当て」の活動に入る前に、投球動作と同じような動きの要素を含んだ「紙鉄砲」、「紙飛行機」、「めんこ」、「ブーメラン遊び」も取り入れることとした。

実際の指導においては、参加した子どもは、紙鉄砲、紙飛行機とも興味を持って各自で作成しようとする意識が見られ、援助が必要な部分のみ指導者が補助を

行った（図15）。実際に子どもたちが紙鉄砲を鳴らす動作や紙飛行機を飛ばす動作の中には、引き腕を大きく引き腕をしならせて音を鳴らしたり（図16及び図17）、遠くへ飛ばそうとする「腕の引き」（図18及び図19）が見られ、遊びの中でこのような動作を体験することが投球動作へとつながっていくと考える。投球動作を習得するためには、ボールを投げる以外にも日常の遊びの中でも様々な動きを経験することが重要であろう。

「まと当て」は遊戯室にまと6体を並べまと当て遊びを行った（図20、21、22）。各自の好きな「まと」を自由に行き来して「まと当て」を行ったので、それぞれの「まと」で何歳児が何人でもまと当てを行ったのかというデータをとることはできていないが、年長児の子ども達には課題として少し難易度の高いストラックアウト形式のまとEや、立体的な作品であるまとFに人気があった。また、投球動作の経験がまだ少な



図15 幼稚園での指導の様子



図16 紙鉄砲を鳴らす様子①



図 17 紙鉄砲を鳴らす様子②



図 18 紙飛行機を飛ばす様子①



図 19 紙飛行機を飛ばす様子②



図 20 まと当て遊びの様子①



図 21 まと当て遊びの様子②



図 22 まと当て遊びの様子③

い子ども達にはまと A～D に人気があったように思われた。

3. 参加学生の学び

ひかり組での「まと当て」活動終了後、参加学生と

担当教員とで幼児の投球動作について感じたこと、指導についての感想・反省について話し合った。保育指導案の立案と模擬保育を行ってみるなどの実際の指導に向けての十分な練習の時間が取れなかったことは、今回の反省点である。

幼児の投球動作に関しては参加学生から次のような気づきや意見が挙がった。

- ・ 投げる際に同じ側の手と足を出している子がいたが、年中児でも利き腕と違う側を踏み込み足として出せている子どももいた。
- ・ 子どもの投球能力は予想通りであった。年少児はまとに入らない子どもがいたかもしれない。年中・年長児は距離・ねらいがちゃんとできていた。
- ・ 「まと」という教材があることで、保育者の意図する習得させたい動き（今回は「上手投げ」）を経験させることができる。
- ・ ストラックアウト方式のまとは上部の方によく投げてまとを抜いていた。まと自体の高さを全体的に高くするとよいと思った。
- ・ 子どもへの声掛けが「投げる」だけでは下手投げになる子どももいる。上手投げをさせなければ、ほかの声掛けのし方をしなければならない。
- ・ 年中さんには、(右利きの子どもには)「左足を出してごらん」などと声掛けをしてもよかったかもしれない。
- ・ 「まと」に「入れる」より「当てる」のほうが強く投げる動機づけになると思われる。

子どもは「まと当て」を楽しむことが活動の目標となるが、保育者側には、活動を楽しむことによって「投球動作を習得する」という意図があるということに参加学生も気づくことができていた。

また、「まと当て」の活動の前に行った投球動作と同じ動きを含む他の遊びの経験については、

- ・ 紙鉄砲：よく音が出ていた。鳴らすことができるということは、肩・腕の使い方ができていて、投球動作につながるのではないか。
- ・ 紙飛行機：飽きずに何度も飛ばしていた。遠くへ飛ばそうと、腕の「引き」はしっかりできていた。これが投げる動作につながればよい。
- ・ 二つの活動について：紙鉄砲、紙飛行機の動きは投球動作と似ているが、次の段階の「投げる」遊びとの結びつきが弱かった。間にブーメランの活動があったら（時間不足により省略）もっとつながりができたかもしれない。

などの意見や発見があがった。

これら以外に、「声掛けがうまくできなかった。子どもへの言葉がけのボキャブラリーを増やしたい」といった保育技術に関する反省もみられた。

以上のことから、「まと制作」の作品としてのまとを教材とした「まと当て」遊びは幼児の投球動作習得のきっかけとするための教材の一つとして適当であると考えられる。そして、参加学生からこのような反省や感想が挙げられたことは、これまでの大学内の授業として行った取り組みに比べて、実際に子どもを対象とした保育を行う体験によって受講生の学びが深まったと考えられる。

V. まとめと将来の展望

子どもを対象とした「まと制作」から「まと当て遊び」までを一連の活動として取り組んだ今回の「図画工作」と「幼児体育」の連携授業としての取り組みは、投球動作習得をねらいとした「保育者としての教材作成」から「保育現場での実践」へとつなげることができ、学生の学びを深めることができた。保育案を立てて指導する機会を得たことは、保育者を目指す受講生にとって実践力を習得する良い経験になったと考えられる。また、教材制作から子どもを対象とした実践までを実施できたことは、受講生が自分たちの作成した教材の効果を実際に確かめることのできる貴重な体験であった。連携授業を開始した当初から子どもを対象とした実践までを一連の活動として予定していたにも関わらず、担当教員と幼稚園の日程調整がうまくつかず、実際の参加者は非常に少なくなってしまったことは反省点であり、今後は作成から子どもを対象とした実施までを受講生全員が取り組めるプログラムを提供することが実践力の育成につながると考えられる。

今回の取り組みのほかにも「図画工作」と「幼児体育」の連携授業の発展として、「床面へのデザインステッカー制作とステップ遊び」のような活動などが考えられる。

質の高い保育者を養成するためには、総合的な活動をコーディネートする力や保育現場での実践力を習得するためのさらなる取り組みが必要であり、今後も教科目を連携させた活動を発展させていきたいと考える。

注及び引用文献

- 1) 幼稚園教育要領 平成 20 年 文部科学省
- 2) 保育所保育指針 平成 20 年 厚生労働省
- 3) 「制作」「製作」の標記について:幼稚園教育要領, 保育所保育指針においては「製作」が使用されるが, 造形表現の領域においてはその意味(制作-作品をすること, 製作-物品をすること 三省堂国語辞典より)から, 一般的に「制作」が用いられる。本稿においては幼稚園教育要領, 保育所保育指針に関連する I 章 2 項については「製作」を, その他の実際の造形活動に関わる部分は「制作」の標記を使用する。
- 4) 坂本孝太郎編 「幼稚園教育要領解説」昭和 39 年 フレーベル館 p4
- 5) 同, p23
- 6) 平成 20 年度版の幼稚園教育要領においても, 「各領域に示すねらいは, 幼稚園における生活の全体を通じ, 幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連を持ちながら次第に達成に向かうものであること, 内容は, 幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」, 保育所保育指針においても, 「乳幼児期にふさわしい体験が得られるように, 生活や遊びを通して総合的に保育すること」, 「五領域ならびに「生命の保持」及び「情緒の安定」に関わる保育の内容は, 子どもの生活や遊びを通して相互に関係を持ちながら, 総合的に展開されるものである」ことが明記されている。
- 7) 民秋言編 「幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷」2008 年 萌文書林 p6
- 8) 同, p13
- 9) 平田智久他編 保育内容「表現」ミネルヴァ書房 2012 年 p26
- 10) 細井誠他 「めんこ投げ遊びや紙てっぽう遊びが児童の投動作に及ぼす効果」奈良教育大学研究紀要(自然科学) Vol.53 no.2 p41-50 2004
- 11) 拙稿 「大学における科目を連携させた授業の取り組み-「図画工作」と「幼児体育」の授業実践報告-」京都光華女子大学短期大学部紀要 平成 20 年 p206

資料1 評価シート例

受講生が作成した評価シートをもとに作成

2011/12/16

テーマ: 宇宙		まと制作・まと当てあそび グループ発表用シート	
担当年齢 < 5歳 >	制作したメンバー * * * * * * * * *		
1. 担当した年齢の子どもの投げ方の特徴 ・ひじを曲げて腕全体を使って投げることができる ・ねらいを定めてそこに投げることができる ・足を開いて身全体を使って力いっぱい投げることができる			
2. 上記の特徴を踏まえて、まとならびに投げるものを作る際に工夫したところ ・まと当ての壁に角度をつけた ・宇宙・空をイメージしてボールを飛行機・ロケットにし、丸みをつけて安全なものにした ・まとの大きさを大・小で差をつけた			

幼児体育Ⅱとしての活動

① この作品でまと当てを行ってみて、あなた自身は投球運動を楽しく行うことができましたか？

とてもそう思う
 どちらでもない
 そう思わない

その理由 ()

②この的に投げることで、上記に書かれている幼児に習得させたい動作が経験できると思いますか？

とてもそう思う
 どちらでもない
 そう思わない

その理由 ()

③このまとは保育教材として適切だと思いますか？

とてもそう思う
 どちらでもない
 そう思わない





その理由 ()

④自由記述 (このまとの作品でまと当てを行って思ったこと、考えたことを自由に書いてください。)

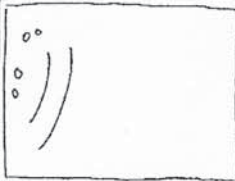
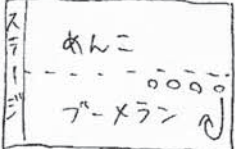

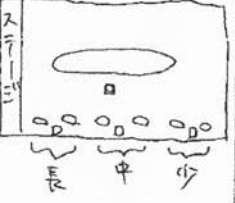
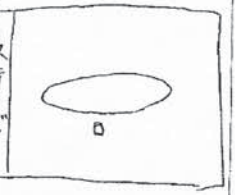
番号() 氏名 ()

資料2 保育指導案

指導計画 (保育)

3 月 7 日 (水 曜日)		組 3・4・5 歳児								
幼児の姿										
ねらいと内容	<p>遊びを通して投動作の発達を促す体験をする</p> <p>子ども23人</p>	<table border="1"> <tr> <td>男児</td> <td>名</td> <td rowspan="3">欠席児</td> </tr> <tr> <td>女児</td> <td>名</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>名</td> </tr> </table>	男児	名	欠席児	女児	名	合計	名	
男児	名	欠席児								
女児	名									
合計	名									
時間	環境構成	予想される幼児の活動	保育者のかかわり							
14:00	<p>ステージ</p> <ul style="list-style-type: none"> 1) 年長 1) 年中 1) 年少 	<p>座って話を聞く</p> <p>立ち歩く子がいる</p> <p>注意: 人に向けて飛ばさない</p>	<p>うごこちを使って楽しく遊ぶ</p> <p>紙で、ほうを後ろから出して遊ばせてみる</p> <p>「すごい音なったか?」皆知ってる? 「じゃあ皆で紙で、ほうを作って鳴らしたいと思います。5歳児さんは作れるかな?」じゃあ紙配ります。</p> <p>紙を配る</p> <p>作っていく</p> <p>作った子どもから鳴らす</p> <p>飛ばしたらまた作って遊ぶ</p> <p>また立ち歩きの場所に集まろう、集める</p>							
14:15		<p><紙で、ほう></p> <ul style="list-style-type: none"> 紙をもらう 作っていく 遊ぶ 	<p>作った子どもから鳴らす</p> <p>飛ばしたらまた作って遊ぶ</p>							
14:20		<p>少しずつ集まってくる</p> <p>座る</p>	<p>また立ち歩きの場所に集まろう、集める</p>							
14:25	 <p>半分にある</p>	<p><紙ひこうき></p> <p>話を聞く</p> <p>注意: 人に向けて飛ばさない</p>	<p>「じゃあ次は紙ひこうきとは?」したいと思うので作ってみよう</p> <p>作った事あるかな?</p> <p>じゃあ紙を配ります</p> <p>作っていく</p> <p>作った子どもから順番の所へ行くとばす</p>							
		<p>紙をもらう</p> <p>作っていく</p>								
										

指導計画 (保育)

時間	環境構成	予想される幼児の活動	保育者のかかわり
14:40		集まる ○半分に分かちる。 12人と11人に分かちる。	喋めて話をする ○「めんこしてる人？」 「めんこは昔の遊びで、11円と12円と違ってあてるともらえる遊びなんだけど、今日は初めての子もいるので、あたらしくもらえることにします。全部で5回に分けるから、その内何枚あてられるかな？」
14:45		遊ぶ	○ブーメラン 「から投げたてたて」
15:00	 	集まる	○集めて最後にまと投げ遊びをしたと思います。 ○自分の好きなままとに行き、投げたてよう。 ○最初はこの□←この線の所から投げたてよう。
15:25		〈まとめ〉	「まと投げ楽しかった?」「どのまとが楽しかった?」 ○「投げた遊びっていいよな?」 ○「また投げた遊びをたたくしして遠くまで投げたり、自分の投げた1円に投げられるようになってくると嬉しいなと思います。ありがとうございました。」

